



1987年(昭和62年)
1月号(No. 499)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目次

- 昭和 61 年度年次晩餐会 (1)
海外の山 (3)
常さんの碑に思う
金山淳二 (4)
講演会「凍傷の原因と病態」
医療・集会委員会 (6)
図書紹介 (6)
「越後山岳第7号」「日本の山」
東西南北 (7)
報告 (9)
「第19回図書交換会(図書委員会)」
「第4回ヒマラヤのエコロジー」
シンポジウム(科学研究・自然保護委員会)
「大無間山」「東京農大報告会」「第29回紅葉会」「虎毛山々行」
本会フィルムライブラリーご利用
について(フィルム委員会) (12)
会務報告・ルーム日誌・会員移動 (13)(15)
図書受入報告 図書委員会 (14)
お知らせ (15)
図書委員会の催し二つ

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時

日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

昭和六十一年度年次晩餐会

——名誉会員に川森左智子氏——

出来であった。

恒例の年次晩餐会が昭和六十一年十二月六日(土)、国電市谷駅近くの私学会館(千代田区九段北四二二十五)において行なわれた。集った会員はほぼ三百名、入場時間の午後五時五十分までに受付けを済ませた会員は、今回、マナスル登頂三十年を記念して、特に晩餐会出席者のため作られたテレフォンカード(五〇度用)を会費と引き換えに受取った(但し五百枚限定のうち、残り二百枚については実費千円でJACオリジナル商品特設販売コーナーで売られ、このテレフォンカードは、亡くなった加藤保男会員がマナスルで撮ってきたカラー写真を使った、たいへんスマートなもので、使用後も値段の付きそう

晩餐会の進行役には総務担当の鳴原常務理事と高遠理事が交代で当った。

開会に当り今西寿雄会長の挨拶があり、今年は立教大学のナンダコート登頂五十年、マナスル登頂三十年に当る、と前置きしたあと、この十一月、マナスルトレッキングに参加したが、今ではヘリコプターを使って簡単に山城まで入ることができ、当時、大キヤラパンを組織したことが思い出されたこと、当時と同じように住民が薪を取りにいつているが、ネズや白樺はそのころより良く繁っていること、サマにいた土場が三百羽ほど、自分たちが帰るとき一斉に飛び立って、ナイケの六千羽のコ



晩餐会出席者のうち 9600 番以降の新入員を紹介

会長挨拶のあとは今回の晩餐会までに通知のあった物故者十五名(山果登、広瀬藤司、今井嘉道、木本善重、杉山正樹、平沢亀一郎、大森常三郎、金坂一郎、木原均、猪俣信市、山本吉之助、早川義郎、三谷孝一、松本秀則、吉川静三の各氏)に対する黙禱が捧げられ、続いて名誉会員の推挙、永年会員の発表が行なわれた(別掲)。

名誉会員に選ばれた川森左智子氏は病気のため出席できず、婦人懇談会担当の梅野淑子理事が代理とした。

このあと食事の合間に、北海道

ブを越え消えていったことなど、トレッキングでの思い出を語り、六月のポーランドの岳人たちの国際交流、松本市で行なわれた国際アルピニスト大会への協力、一九八八年に行なわれるサガルマタ/チョモランマの三国合同登山など、本会の動きがいつそう国際的になってきていること、それと並行して各ブロックごとの支部合同懇談会など、会運営の活発化、支部の活性化が来年度の会費値上げには含まれていることなどが話があった。

今西錦司名誉会員の音頭で乾杯が済んだあとは、それぞれのテーブルでテーブルマスターを中心、食事をしながら自己紹介などして歓談が続いた。

食事の途中で第三次マナスル遠征のとき今西寿雄会長の撮ったスライド写真がスクリーンに写し出され、隊員であった松田評議員から一つ一つ説明があった。当時、何回となく使われたスライドだったせいか少し色合いが悪かったようだが、数々のエピソードを交えた松田会員の説明に、会場では何回となく笑いこえが起り、観賞した出席者はしばしば三十年前の思い出を楽しんだ。

お知らせ電話

234 六六五九

から九州までの各支部からやって来た会員たちの紹介、一昨年の晩餐会以降入会した会員番号九六〇番からの新入会員の紹介があり、九九六九番の河村忠明会員から、伝統ある日本山岳会会員として精進したいので、ご指導ご鞭撻を願いたいという新入会員を代表しての挨拶があり、さらに、八七年支部ブロック会議は京都支部が幹事支部になること、本年度の国の文化功労者に選ばれた小田稔会員、本年度毎日出版文化賞を受けた近藤緑会員の紹介などあり、午後八時三十分、大塚副会長の閉会の挨拶で本年度の年次晩餐会は終了した。

このあと、出席者は例年通り自分の名札と引き換えに『山岳』(八十二年)を手にし、夫々、師走の街に散った。

(写真・武居台三)

文・岡沢祐吉

〔新名誉会員紹介〕

川森左智子(三〇〇七番)

明治四十二年一月十四日生

同志社専門学校卒

昭和二十二年四月入会

昭和十一年、前穂北尾根四峰(奥又白沢)日本登高会ルート開拓。

昭和十三年、日本登高会のメンバーおよび大阪のクラブエーデルワイスの仲間と北穂第三尾根を登ったり、戦後の昭和三十三年にはマッサーホルン、モンブランなどヨーロッパ・アルプスに登った。

本会に東京支部があった頃の昭和二十五年、二十七年、二十八年には支部役員を務め、小集会や婦人部の担当として活躍した。昭和四十二年四月より翌年三月まで評議員、同年四月より翌年三月までは本会の理事を務めた。

著書『初恋の山』。

〔新永年会員紹介〕

谷口現吉(一六三六番)

明治四十三年九月十七日生

慶応義塾大学卒

昭和十一年三月入会

紹介者 横 有恒、三田幸夫

中村テル(一六四一番)

明治三十七年八月二十三日生

桜井女塾卒

昭和十一年三月入会

紹介者 鳥山徳成、藤島敏男

今西寿雄(一六四九番)

大正三年九月九日生

京都大学卒

昭和十一年四月入会

紹介者 宮崎武夫、盛岡英治郎

三日月直之(一六五四番)

明治四十四年五月二日生

鳥取高等農林学校卒

昭和十一年四月入会

紹介者 藤本九三、加藤敦功、西岡一雄

外山義夫(一六六四番)

明治四十三年七月十五日生

慶応義塾大学卒

昭和十一年四月入会

紹介者 三田幸夫、内田(勇)

金山淳二(一六七一番)

明治四十二年六月二十二日生

慶応義塾大学卒

昭和十一年八月入会

紹介者 松方三郎、中屋健一

榎本豊松(一六八三番)

明治四十三年三月十四日生

埼玉県立杉戸農業学校卒

昭和十一年十二月入会

紹介者 黒田孝雄、石田

〔永年会員となった感想〕

▼谷口現吉氏

「学校を卒業したので昭和十一年に入会、言わば昭和一桁の上高地の地廻りです。『あのデブが慶応の谷口だ』とあそこで変な奴が言っていますよ、と若い部員の注進に彼方を見れば、それが『甲南の田口』だったりましたもんです。山は黙って登っていいればいいんだと力む、怖い先輩がいて、とても他校の連中と馴々しくなどできなかったのに、後年『お前はそっくり返って口もきかなかった』とすっぱ抜かれて、やたらに当時は懐かしんだことですが、そんな連中が数年前から段々永年会員になり始めているわけですね、敗戦と同時に、昔のことなどすっかり忘れて、弥一っあを頭領にして、松方さんの傘下でガヤガヤ始め、

山をきれいにグミは持ち帰ろう

それがマナスルの中核になった次第です。

交野、藤井、泰安、折井、山崎、林などそのなかから消えてしまつて淋しいことです。

▼中村テル氏

「昭和六年に東京キリスト教女子青年会に本格的な女子の登山を目的とする山岳会を黒田初子、鳥山吉端、三田好子などと創立し、六年より十二年、結婚するまで会長となる。その後も朝鮮より時々内地に来て山岳会会長の役を果たす。戦争にて登山活動出来ず休会し、戦後、キリスト教女子青年会の組織改められて山岳会は解散する。日本山岳会に入会させて頂き、先輩たちの良き指導を受けることができた感謝です。また海外委員会のお手伝いができて身にあまりの光栄と喜んでいきます。」

▼今西寿雄氏

「戦後はたいへん難しい人がいたが、現在は民主的な会になっていく。」

▼三日月直之氏

「いつのまに五十年が経過したのかというのが実感です。私は単独登高派で、足跡は東北から南は台湾までの三百余峰。また昭和十一年十一月創立の半官半民の国策会社『台湾拓殖会社』に、創立と

ともに台北本社拓殖課勤務を命ぜられ赴任しました。工業企画主任としての任務の一つに資源調査があり、それを利用して台湾山脈各峰へ登りましたが、台湾山岳会に入会することは考えませんでした。それは岩登りの技術的信頼を持てる相棒がいそうになかったからです。続いて蘭印・英領北ボルネオに資源調査のため四ヵ月出張、ジャバ、スマトラ、ボルネオの高峰を巡り、十六年十二月、四ヵ月間印に出張、安南、ラオス、カンボジャへ調査行し、モンランビアンその他に登頂。本社南方第一課長、総務課長、土地部長代理で終戦帰国。九州山岳連盟の再編成、福岡山岳連盟の結成など、長年山岳会の組織化の裏方を務めてきました。所詮、単独行好きで、目立つことの嫌いな、そして戦後生活のなかでそうだったかったことと、四十五歳のとき岩場で左膝を痛め神経痛に苦しみ、登れぬ山好きになり果てたため、福岡市の『まいずる山岳会』の顧問を務めて、若い人々に昔の懐旧談をすることが楽しみとなつてしまつた昨今です。永年会員とのこと、もうそんなになつたのかなあと感慨に耽ります。気分は若く、今も、北海道から台湾まで、戦後何百回

も旅を続け、ハワイ、グアムへもときどき行きます」。

▼外山義夫氏

「特になし」

▼金山淳二氏

「私の虎ノ門時代の会長は木暮理太郎さん、副会長は横有恒さん(途中から西堀栄三郎さん)、五十年があつたというまに過ぎた感じ、光栄です」。

▼榎本豊松氏

「体力の衰えは何とも致しかたなく、時には番茶を入れたテルモスと甘味を入れた袋を背に四時間程度の丘陵遠足をして、若いころの山行を思い出している今日このごろです。夜は早く床につく習慣なので、晩餐会は失礼します。悪しからず」。

(何か一言) から

晩餐会の返信用「ハガキ」の(何か一言)の中から、会員皆さんの近況、ご意見等を一部紹介します(順不同、敬称略)。

【近況】

「毎朝のように雪が冬への景色を作りあげて行く中で、露天風呂につかって、今冬はこのニセコの山にシユプールを美しく刻んでやろうと、杯を重ねております」

北海道 織笠巖(六八八二)

「出席して皆さんとお話したり致したいのですが、何しろ八十八歳ですので思うようにならず、欠席させて頂きます」

山形 石井貞吉(三五二五)

「十二月で八十歳の齢を数えることになりました。九州でも古い山友が減って行くばかり、寂しい思いです。スキー控後の後遺症で山歩きも出来ず、下界山村の写真撮影に浮き身を焦がしています」

福岡 月原俊二(一四三六)

「昔登山したお陰で、九十歳を過ぎても元気に出歩いております」

東京 伴野清(二八四)

「来年は米寿。山やスキーはもう昔の話です。二階の書斎から鳥海山の新雪を望みます」

山形 畠中善弥(二二〇二)

「落花幾片 隋水去、長笛一声 出雲来」

埼玉 千谷壮之助(二七六九)

「当年とって八十六歳。若い時から山と一緒に生きてきたためか、山のお陰で健康に暮らしています。今冬も孫と一緒にスキーをやるつもりです。ひと頃より会の活動に活気があり、便りを戴くのが楽しい程です。若い方の活動に期待します」

福島 齊藤啓助(二八六六)

「小生は旧制名古屋高商山岳部(現名古屋大)出身にて、OBになつてからも五十歳くらいまで現役の合宿に参加しておりました。もうすぐ七十二歳です。今でも毎年孫達とスキーに行きますし、宝剣や蔵王のような山へ行き、下山のみブラブラ歩いております。もう登山でなく、山下り専門の岳人

海外の山

テンジンの悲しみ

外務省情報文化局が、一九六四年一月十八日付で「インドの登山家テンジン氏の来日について」という記事資料を報道各社に流している。

「エヴェレスト登山で有名なテンジン・ノルゲイ氏は外務省の招きで二月二日午後九時羽田着の日航機で来日する予定である。(中略)わが山岳会は一九六六年三月から五月にかけて国民的規模でエヴェレスト登山計画をたてている折柄、今回の同氏の訪日は甚だ有義と認められる」

気軽に海外の山を目指す時代になったとはいえ、外務省の招待でやって来る登山家は多くない。世界最高峰に初めて立ったこのアジア人は、十日の短い滞在の間、江ノ島、鎌倉、日光、大阪、奈良を駆け歩き、国際親善につくした。

栄光の日から三十三年を経た昨年五月、テンジンは七十二年の生涯を終えた。ダーズリンで営まれた葬儀は、盛大なものだったという。

にも関わらずテンジンが、晩年は決して自身を幸せに思っていたわけではないことを、英「マウンテン」誌最新号の中でエドモンド・ヒラリーが書いている。

ヒラリーによると、ダーズリンの登山学校のチーフ・インストラクターの職(よく伝えられるような校長ではなかったらしい)を退いてから、テンジンは大家族を養うために頻繁にトレッキングや観光ツアーに出るようになった。そうした仕事を通じてこの十年は以前にもまして互いに会う機会が増えたという。

なつた二人は、登山家としての隆盛を過ぎてからより親密になったのである。

「深い悲しみが彼の内にあるのに私は気づいた」と、ヒラリーは述べている。とりわけネール首相の死後、インド政府が経済的に彼に手厚くしなかつたことが不満だったらしい。「皆、私のことを忘れてしまった」と、テンジンは折につけて言った。

エヴェレストの最初の登頂者であることを、テンジンは、何よりも誇りとしていた。そして、あまりにもそれを誇りとするあまり、他人が彼の成し遂げた以上の事、例えばその頂上に二回も登るとか酸素ボンベなしで登るとか、の報には露骨に落胆の表情を見せた。

実際に登頂が可能かどうかさえわからなかった時に自分が初めてそれをなしとげたことを彼は忘れてしまったようだ、とヒラリーは言う。一九五三年、二人が東南稜をよじのぼった際、テンジンがどんなに頂上への意欲に溢れていたか、そして強かったか、このニュージランド人は誰よりも深く知っているのである。

スマイス、シブトン、ティルマンと共に、そして一九五二年のスイス隊のメンバーとして、時にはアール・デンマンのような無鉄砲な単独行者の道先案内人として、テンジンは最も果敢にエヴェレストに挑んだ男である。葬儀につめかけた群衆を見て、ヒラリーは彼の寂しき、悲しみが根拠あるものではなかった、と思う。しかし、つかんだ栄光が大きければそれだけ、名声を失うことの不安もまた小さくはなかったのだろう。

大きな勝利の後にやがて訪れる焦燥感。シエル・ガイドとしてではなく、人間としてのテンジンの一面を見る思いがする。

(江本嘉伸)

となりました」

東京 中笠愛三(二四七八)

「五十年ほど前の晩餐会。昭和十年五月四日午後六時より京橋中央亭で。出席者四十七名の大盛會。これは三十周年記念晩餐会でした」

千葉 小野幸(一八三八)

「目と鼻の先の湘南平への山行、何はさておき参加したいのはやまやまですが歳とともに脚力が怪しくなり、お供をする自信がありません」

神奈川 菊地正蔵(一〇七八)

「七十歳代も半ば近くになって、筆をとることが億劫になりました。山田哲郎氏から南会津朝日の初期登山について書けとのことですが、気が乗らないのでそのままになっていきます。昭和三年八月に六日程かけて鋸刃を往復しています」

新潟 佐藤金一(二五〇五)

「北の山々は白銀の季節となりました。三十数年前の第九回大雪山国体(夏季)、三十一年前の全日本体育大会十勝岳(冬季)等に、全国より参加された山男を思い出しております」

北海道 小須田喜夫(三三三九)

「上高地の近く、木曾へ抜ける途中でヒュッテをしております。お立ち寄り下さい。スキー場もあります」

長野 松久幸司(八〇三四)

「警梯吾妻スカイラインも十一

月十五日で閉鎖となります。私事です。村議会、町議会、市議会議員として三十五年以上勤務、自治大臣より受章」

福島 後藤泰治(三二二六)

「早池峰国定公園になって四年の昨年は全国山岳大会、今年は東北総体会場で賑わいました。頂上小屋も二十年振りで改装されました。ぜひ『みちのく』の山行を企画していただきたく存じます」

岩手 村田栄太(八九八七)

「山陰の名峰大山も国立公園指定五十周年になりました。過去半世紀が開発、自然破壊の歴史だったように、これからもさらに大規模な自然破壊が、時代の要請、時の流れという名目で展開されようとしております。孤立を恐れず、国立公園本来の理念である自然保護元年に、と悲戦苦闘しております」

鳥取 羽賀克己(七五〇〇)

「阿武隈の山にも、石材採掘による自然破壊が、各地に発生しています」

福島 宗像清吉(七六五三)

「奥羽の山々は最早スキーの季節です。十月十日船形山系前森南東面ルンゼを高橋二義会員(七八八五、他一名と初登攀しました」

宮城 後藤邦慶(九七六六)

「十月中旬、新潟、山形両県にまたがる朝日林道の紅葉探訪をしてきました。八〇〇年の歴史ある三面部落がダムの水底に沈むため無人の廃屋となっている胸痛む風

常さんの碑に思う

金山淳二

真実の人生に生き

た内野常次郎君

こゝに眠る

横有恒

自然石にこう刻まれた碑が上高地にあるが案外知られていないので紹介したい。



裏面には『内野常次郎君略歴』として、

明治十七年九月二日飛騨の国中尾に生れ、年少より山に入り先蹤上條嘉門次の衣鉢をつぎ、この地にあること五十年、上高地に住む自然人としてその風景の点晴とも言ふべき存在であった。飛騨犬を友として終生要らず恬淡無慾、酒を愛し、訪う人あれば遇するに厚く、自に薄く、類稀れる自然人として多くの人に敬愛された。後略

安曇村々長 前田悦之助書

昭和四十二年十月建之

施主 内野吉十郎

牛丸 亮次

と記されている。

この略歴は村井米子さんの案を初見一雄・谷口現吉の両氏が推敲加筆したもので、当時の前田村長が書を能くする人だったので、揮毫を依頼したと聞いている。内野吉十郎は常さんの甥、牛丸亮次は姪が嫁いだ島々の人。

碑の立っている場所はバスターミナルと河童橋の間、中日新聞上高地支局の敷地内で、奥穂高頂上と極めて正確に対峙するように建てられている。

路から五、六メートルしか入っていないのだ

が、その間僅数で直接には見えにくい。その上、昭和六十年秋にはなかったのに、昨年はその入口に『こちらターミナル、あちら河童橋』と書かれた指導標が新しく立てられた。このため却ってオフリミットの場所と思われ、訪う人も更に少くなるのではと心配だ。

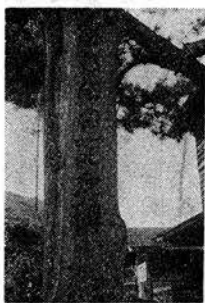
横さんの書かれた碑文は他にもあるようだが、こんなに短く、しかも素晴らしい文面のもはなからう。常さん以て冥すべしである。

除幕式は昭和四十二年十月二十九日、百名以上集った参列者を代表して今西錦司さんが挨拶された。そして『本来横さんが見えられずはざったが、吉田茂さんの国葬日の関係で私が代って：』と言われたのを、横さんを期待していただけないははつきり覚えてる。

今西さんは除幕式を終えると祝宴も待たずすぐ引上げられたが、その夜小梨平で、日本山岳会や信濃支部の有志、それに中尾、島々、白骨など地元の人達によって盛大な祝宴が開かれた。声楽家の四家文子さんの熱唱もあった。そして参加記念として、常さんがイロリに差した鰯の前にとっかりあぐらをかいている似顔の絵皿が配られた。

また中尾にも常さんの記念柱が立っている。付近は全く変わってしまったが、中尾峠から中尾へ下った突当りの角の手前に、三十センチ角、四メートルほどの大きな木柱「常さんの記念碑」がある。そこは常さんの生家のすぐそばで、部落の人達が将来ほんとの記念碑にする意図があったかも知れない。

が、いつ立てられたのか私は知らない。



後日譚になる

景に感慨を深くしてきました」
 福島 久木春男(二八六三)
 「遂に武甲山一五二回登頂を
 しました」

千葉 松本寿一(八六三四)
 「九月二十八日、藤平正夫(二
 二四七)、太田昭(八五四〇)両
 氏と共に福井県の独立峰荒島岳山
 頂に立つ」

富山 亀谷外毅雄(三九九〇)
 「先日、南アルプスを歩いてま
 いりました。大樺沢上部、北岳、
 吊尾根も新雪を冠り、今年は雪が
 早く感じられました」

神奈川 水沼数馬(二二三一)
 「全山を錦繡に彩った紅葉もよ
 うやく終わり、稜線の新雪も白銀
 の輝きをひとしお眩しく感じるよ
 うになりました」

群馬 山口京一(二二一三六)
 「この夏は家族四人で上高地の
 山研に御世話になり、奥穂前穂
 の縦走を果たしました」

熊本 川端浩文(九三二八)
 「もう二十年近くもルームへ顔
 を出していません。当時顔馴染み
 だった方々の訃報にも随分と接し
 ました」

東京 荒木正弘(五〇三五)
 「旭川に戻って以来、昭和二十
 八年に伺っただけで御無沙汰し
 ております。戦前のルームと今日
 は隔世の感があると思います。仲
 の良い結びつきを大いに拉げて下
 さい」

北海道 奥田五郎(一七〇二)

「変形性膝関節症になってから
 は山とまったく無関係。県展入選
 以来山の絵一本やり。来年は人の
 薦めもあり個展を開く予定。山に
 登れずとも絵を描いていると、思
 い出も楽しい」

香川 藤野澤祐(二二七六)
 「会報を読ませて戴くのみの方
 員ですが、その会報を隅々まで拝
 見し、大先輩の格調高い御心に触
 れられるのをうれしく思っており
 ます」

東京 小岩清水(六五四三)
 同様の趣旨で、

愛媛 増岡栄一(八四六二)、
 福岡 村岡由貴夫(九六三〇)

他
 「確保技術の研究を続けており
 ます」

三重 石岡繁雄(四〇〇六)
 「病氣療養中のため欠席。盛会
 を祈る」

東京 山崎金次郎(八二七)、東
 京 中屋健一(二二四七)、神奈川
 山口健児(一一七一)、神奈川 増
 本茂(一四〇五)、神奈川 田中栄
 蔵(二二五三)、神奈川 小林重一
 (七三九三)、神奈川 三上正治
 (五五四二)、大分 庄定人(八五
 六〇)

「健康を害し出席出来ず残念」
 の趣旨で、

新潟 森谷周野(二四一〇)、神
 奈川 小川猛臣(六一六七)、東京
 原田衛(八〇〇七) 他

「マナスル三十周年大慶至極に

が、昭和四十四年六月のウェストン祭に横有恒、
 佐藤久一朗のお二人が連れ立って罫止小屋に泊
 り、徳本を越えて上高地に入られた。偶々私はそ
 の直後、同じく罫止小屋に泊り上高地に入ったの
 だが、その時小屋主の奥原氏から両先輩がここに
 泊られた話を聞き、自分なりに色々思いを馳せ
 た。
 遠慮のいらぬお二人の間柄のこと、どんな話
 常さんの碑に思う

存じます」
 兵庫 橋真琴(一七七七)、京都
 松村多四郎(五五九五)、宮城 西
 郡光昭(七三五四)、東京 本橋淳
 次(七八〇九) 他

その他「所用あり出席出来ず」
 の趣旨で約二〇〇通。

【会の運営等に対する意見、要
 望】

「地方在住会員に目を向けてく
 れるようになったことに感謝して
 います」

福島 室次雄(五三三七)
 「地方の会員に山岳会の販売品
 のカタログ等があれば……という
 声を聞く」

岐阜 島田靖(七八五八)
 「販売品等が欲しくても手に入
 らず困っています。何か、全員が
 持てる帽子、Tシャツとかの企画
 に期待しています」

秋田 長岩嘉悦(四八五九)
 「晩餐会も時には地方で行なっ
 てみては……」

福岡 堤甚五郎(四一六二)、
 大分 古我静(八八三四)

「晩餐会」は少々会費が高くな

が交されたらどうか。一つはウェストンの像、一
 つは常さんの碑文、上高地に遺された二人の記念
 物について話題が展開したことは容易に想像され
 る。
 その後私は徳本を越えたことはないが、二つの
 記念物に接するためにも、これからも屢々上高地
 を訪ねたいと思う。
 (六十一年八月)

「とても一流ホテルで行なって欲し
 い」

東京 宿輪浩一(八四一九)
 「年次晩餐会の会費も一万円に
 なり、汽車賃も一万円以上となっ
 てしまい、出席者も三〇〇人も集
 まって……楽しみにして東
 京に足が向かなくなってきた」

静岡 水野公男(五五三四)
 「会費を増額してでも会員に『山
 日記』の無料配布をして戴けない
 か」

東京 遠藤泰孝(九二二二)
 「この一年間、単独行による遭
 難と、中高年登山の遭難が目立っ
 た。日本山岳会として何か対策は
 ないか」

静岡 竹端節次(五四五二)
 「若い方々の『土曜会』への出
 席を望む。フレッシュなムードと
 活発な現況を吹き込んで戴きた
 い。先輩方の話にも聞いて戴きた
 い至言があります。山で結ばれた
 仲間が共に語り合い、笑い、喜び
 合っている中に『老人達の姿』こ
 そ、将来の自分達の姿」と望んで
 いただけようになったら、最高

「もっと山旅と集会を計画して
 下さい」

神奈川 祖父川精治(八五四四)
 「どのようにしたら会の人とコ
 ミュニケーションがとれるかと悩
 んでいる毎日です」

神奈川 新井弘美(九九六一)
 「本会役員と林野庁、環境庁と
 年一回くらい国内の原生林に関し
 ての話し合いの場をもたれたら如
 何か」

福岡 渡部智俱人(九五五七)
 「〇〇周年といったような記念
 晩餐会ならともかく、そうでない
 普通の年次晩餐会に毎回記念品を
 添えるのは良いこととは思わな
 い。中止されたい」

東京 望月達夫(一七三九)
 他にも多数の(一言)がありま
 したが紙面の都合上割愛させてい
 いただきました。
 (総務・坂本正智)

講演会

「凍傷の原因と病態」

医療・集委員会

十一月二十八日(金)、東横病院・整形外科医長・金田正樹先生による「凍傷の原因と病態」の講演がルームにて行なわれた。その要旨は次の如くである。

凍傷の病態には、血管説と寒冷による直接組織傷害説があり、現在血管説が考えられている。即ち

身体が寒冷にさらされた際、交感神経の作用により末梢血管の収縮が起り血流が少なくなつて組織傷害が起るといふことである。次に凍傷の分類として、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ度、更にミイラ化するⅣ度の解説があり、具体的な症例を中心に九十八例の自験例から話が展開された。印象に残つた幾つかをピックアップする。

(一) ハケ岳周辺での受傷が多い。これは冬山入門コースであり、初心者が多いためである。しかし注目されるのは、リーダーがしっかりしているグループには凍傷が少なく、しっかりしていないグループでは受傷者が多いということである。少なくとも、人を連れて冬山に出かける人は凍傷に関して十分な認識が必要である。

(二) 傷部位について、
①手指の場合、右手の中・環

・小指が多い。これはピッケルを握る部位のためである。ピッケルを握る部位には、熱伝導の悪いものでカバーすることが提案された。
④足趾では拇趾・小趾が多い。これは靴によるせいで、受傷者の問診からは、全員が靴が小さすぎたという報告があった。

(三) Ⅱ度とⅢ度との差は、寒冷にさらされた時間の差によるといふ。Ⅱ度で水泡形成がみられるが、この水泡は絶対に破つてはいけない。水泡を形成している皮膚が細菌感染を防ぐので、破つてしまつと細菌感染が起りやすくなる。一旦、細菌感染を起すと血行動態が悪いので治りにくい。
以上の内容の中から凍傷予防に關しては、

①とにかく血液の流れを阻害しないこと、手指に關しては指を曲げたり伸展させたりして血流をよくすること、
②足趾に關しては、小さめの靴は絶対いけない。ピバーク時には靴をぬいで、足趾の観察を行ないマッサージして血行をよくすること、

③凍傷になったら消毒液を入れたお湯で暖めること、消毒液は薬局で売っているので、小ビンに分



図書紹介

『越後山岳』第7号

日本山岳会越後支部著

『越後山岳』はJAC越後支部の機関誌である。

今回、その7号が出た。6号が出版されてからほぼ二十年ぶりの復活であるからなつかしい。

『越後山岳』の創刊は戦後間もない昭和二十三年に遡る。そしてその後はほぼ順調に刊行を続けてきたが、昭和四十一年、新潟県境全縦走踏査記録の第6号を最後にして長いこと姿を消した。関係者にとっては誠に淋しい歲月であった。

その間、地方支部の苦しい財政、人間関係その他諸々の事情が存在していた、決して編集を怠っていたのではないという。

そのあたりのいきさつを佐藤一栄支部長並びに全面的に編集作業に当つた上村幹雄副支部長は

まえがきと後記に詳細に述べている。そして次のようにも言っている。

「当初は30周年を記念して」計画されたが、諸般の事情で「心ならずも延引せざるを得なかった」そのため「現在からほぼ十年も遡つた当時の支部の姿を再現する形となり」若干の「違和感」のあるものとなつてしまった。

こうした生みの苦しみを乗り越えて発刊された本書に私は越後人特有のねばり強さを見るのである。そして本文にも体裁にも随所に越後の風土の香りがただよっているような気がするのである。

本書にもり込まれた記録は越後山岳人の実践・行動そのものであり、それぞれに生々としており、今でも決して違和感などは伴っていないと思う。よきものは永遠の輝きをもつものであることを本書は示しているのである。これは各執筆者の努力もさることながら、日本山岳会越後支部の誇りと面目にかけて完璧なまでに推敲を重ねた元支部長藤島玄氏の努力に負うところも大きい。

内容は「越後の一等三角点の山々とその周辺(二八編)」「随想・随感(八編)」そして「海外の山(一〇編)」の三章からなっている。

苗場山、弥彦山、国上山、護摩

堂山、樺ガ平山、経塚山、松平山、新保岳、朴坂山、鋸山、千本山、高場山、割引山、妙高山、鉾ガ岳、梅海新道、斑尾山、博士山、会津駒ガ岳、七ガ岳、飯森山、守門岳、等々と有名無名、その範囲も新潟県を中心として会津や信州にまで及ぶ山々が並んでいる。また、随想・随感では岳人ならぬ越後文人たちの多才さを示す好編がいくつもあつて素晴らしい。

また更に支部員たちの活躍の場が広くヨーロッパ、アルプス、韓国、ボルネオ、ヒマラヤ、台湾の山城まで広がり、越後岳人の心意気を示しているのが最後の「海外の山」と言えようか。越後支部は昨年十月創立40周年を迎えた。その記念すべき年に機関誌が復活したことを、とにかく喜びたい。そして再び息を吹き返した『越後山岳』が更に第8号への期待をつないで呉れることを祈っている。

とにかく好著である。JACの会員としては是非とも一読をおすすめする。

A5判 本文三七八ページ、定価二五〇〇円(送料三〇〇円)

連絡先 新潟市営所通一番町三〇一 学生書房 井口正男 日本山岳会越後支部

(小倉 厚)

けて持参するとよい。

以上今回の講演では、これから冬山に出かける人に対して、実践



小林太刀夫先生

を囲み

金峰山に登る

小林太刀夫先生を囲んでの山行が、平柳一郎さんの肝入りで実現の運びとなった。

小林先生は東大名誉教授、現特定医療法人財団小林記念会・城南総合病院名誉院長で心臓疾患の権威として著名な方。日本山岳会でも、昭和五十六年十一月十二日、科学研究委員会、医療委員会主催による講演会で、「高齢者の安全登山」と題して講演をされている。(会報四四〇号所載)

この講演会に出席した平柳さんが、直接城南総合病院の門戸をたたき、私も同氏の紹介により患者の一員に加えていただくなど、小林先生の手を煩わせる人も増え、先生を囲んでの山行希望、気運が

的な内容であったので、初心者もベテランも大いに参考になったと思う。(浜口欣一)

盛り上った。

山行は十一月一三日、梓山の白木屋旅館、金峰山小屋に宿泊、金峰山に登ることとした。

二日の廻目平出発に始まり、三日のみずがき山荘到着まで終日快晴に恵まれ、わけても山頂からの展望はすばらしく、新雪に輝く南、北、中央アルプスは指呼の間にあった。

行動中は心拍数の測定など実技も加え、三十分歩いて五分休むといった考えは捨て、疲れを感じる前に休息をとる、休息は陽当りの良い場所、体温を急激に落さないなど、平均年齢五十を過ぎたわれわれは、最も効率の良い登り方を会得した。

金峰山直下から千代の吹上げ付近までは、道がアイスバーン状になっていて、さりげなく軽アイゼンを持参された先生には、ただ脱帽するばかりであった。一高旅行部での活躍や田口二郎前副会長らとの豊富な登山経験、それはまさに年輪の差である。

最後に個人的なことをいわせてもらうならば、小林先生との出会いとなった講演会を企画された、科学研究、医療両委員会に感謝すると同時に、日本山岳会ならではの

図書紹介

日本の自然シリーズ

日本の山

岩波書店編

この本は一般読者を対象としたシリーズ「日本の自然」の中の一巻であり、豊富な写真や三色刷図版が用いられ目で見るとしても作られている。最新の研究成果を極力とり込んで横断的、総合的にとらえた日本の自然の全体像を示そうとした試みである。また「日本の自然」という表題にその意味が込められているような、世界の自然に対する視点がある。この点に関しては従来の研究方向は日本的ひとりよがりにとらわれていた。十年ほど前に「科学」(岩波書店)で「日本の自然」(「こゝろ」)を特集したことがあり、このシリーズもその流れの中にあるようである。

本書「日本の山」は北海道から九州までの日本列島の山々を、「北海道と東北の山やま」、「関東周辺とフォッサマグナの山やま」、「日本の屋根中部山岳」、「近畿北部と中国の山やま」、「紀伊山地、四国と九州の山やま」の、あるまとまりを持った五つのブロックに分け、少ないスペースの中に要領よく各

山地の特色を説明している(スペースが少なすぎて不十分なところもある)。また記述は「現地に読者を案内して説明するように」書かれている。

今までに日本アルプスについての解説書は多くとも、北海道のなだらかな山々のことや、高山の少ない中国や四国、九州の山について書かれたものは稀であったし、上越の雪崩が削った山のことや、房総の山について書かれたものはなかった。このようにして広く日本全体の山地を個々にとりあげてゆくことによって、北上山地と紀伊山地の違いというような地域ごとの山々の特色が浮彫りにされてゆく。

地形、地質の視点による「日本の山」がテーマなのでページごとに地質時代名や岩石名が登場するのは当然であるが、それらを除くと準平原、隆起準平原という用語の使用頻度が高く、どのブロックの山地の説明にも出てくるのに気がつくことだろう。そしてそれに続いて第四紀、隆起、断層、褶曲とごく似た説明が続く。すなわち上にみたような地質的な個性はあるものの、日本の山々は終章の説明にあるように「日本山脈」という別の視点からも眺めることのできる存在であり、地球大の視点からすれば、ごく新しい時代に現在のような山となり、現在も変動

を続けている変動帯の山ということでは一括できる。

ところで研究の現場においても常に世界的視点を忘れないことが望ましいが、現実には対象がすべてになってしまいがちである。また一方、地域全体を眺めたり、世界的視野で述べたりすればどうしても大雑把な議論に終始しがちである。この小さな本に多くを盛り込むのは無理難題であるが、本書の読後感がやや不消化な印象を与えるのは上のようなことが原因であり、一層の工夫が望まれるところである。

最後にもう一言加えさせてもらうならば、「科学」では特集「日本の自然」の三年後に「現代の自然」を特集している(「こゝろ」)。これは「社会化された自然を問う」というテーマを持ったものである。啓蒙的な今回のシリーズとは別に破壊されてゆく「日本の山」準平原面上に別荘地やゴルフ場が次々に作られてゆくというような「現状を「科学的な一巻」でまとめもらいたいものである。

一九八六年六月 岩波書店刊
二五九ページ、定価三四〇〇円

(児玉 茂)

の会員相互の結びつき、就中、小林先生の温情に至福を感じたのは私だけであろうか。

参加者を列記すれば、患者としてではなく、小林先生の警咳に接したい人を含め、小林太刀夫先生、平柳一郎、重村清、大木淑子、岩堀瑞子、荒野康子、高田真哉の七名。
(高田真哉)

蜂谷さんに

毎日出版文化賞

会員蜂谷緑(近藤緑)さんが、このほど第四〇回毎日出版文化賞を受賞された。対象となったのは『ミズバショウの花いつまでも』(佼成出版社、一九八五年十月刊、一二〇〇円)で、書名からわかるように、自然保護問題でゆるる尾瀬と、そこに生きてきた平野長英を中心に、父長蔵、子息長靖の三代の人生を描いたもの。読者対象は中学生だが、すでに『常念の見える町―安曇野抄―』で定評ある蜂谷さんのやわらかな筆致が、津田櫓冬画伯の豊富な挿画と相まってみごとに対象をとらえていて、中学生だけに読ませておくのはもったいない。

なお、夫君の近藤信行氏がすでに第五回大佛次郎賞(朝日新聞社)を受賞(『小島島水 山の風流使者伝』)されているので、山の世界のみならずすべての分野で

山で貰った御親切

柿原 謙一

今年の秋雲取山に登る。翌日石尾根の鷹巣山から急坂を降り、バス停の中目原に到着寸前、奥多摩行きのバスが通過し、車道にてその後姿を見送る羽目にあった。二時間もまたぬとお次ぎがこない。ハイヤーを頼むべく電話をたずねていると、うしろからマイカーがチャカより、「残念でしたね。私は用もすんだので、駅の方を廻って帰ります。お乗り下さい」と、願ってもない御親切な言葉。

車内で会話中に、どこへ帰るか聞かれた。奥多摩駅―拝島―東飯能と答えると、なんとその中年の人は、「私も東飯能で用をたし、埼玉の坂戸町へ帰ります。東飯能まで一緒にしましょう!!」とのこと。すっかり好意に甘えて、東飯能駅前でお別れしたが、車道ができていたので、所要時間は一・五時間弱ですんだ。タバコ代のお礼を申しだすと、キッパリ拒絶され、ご厚志だけを頂戴してしまつた。ずっと日本油脂(株)の仕事を請けており、若いときは山にも登られたという。実はこのような御親切を、七十歳前後からしばしばうけてきた。このたびは偶然とは申せ、幸運中の高連だった。

記憶に残る御親切では、私の六十二歳の春に、秩父の峠をこして神流川の宮地に降り、大福峠をへて桃森まで至った夕方のことである。そこから赤木平に直行して泊り、赤久縄行きの山路は、すでに旧態なく、万場廻りでない駄目だよと老婆に諭された。「倅がそ

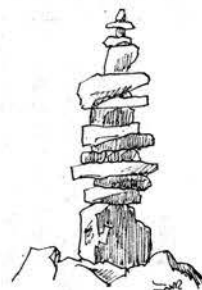
ろそろ高崎の女学校から帰省する娘を、迎えに車でゆくから、それに乗って万場へゆきなさい。困ったときはお互いさまだよ。これには唸らせられた。おかげでその夜暗くなつたが、赤木平の赤石荘までゆけた。このときも茶代橋銭一切お断りだった。翌日は赤久縄山をこして平原部落の車道にでると、土地の人が富岡へゆく車に乗れという。一泊二日の山旅で、二回も御親切を貰ったことになる。

山行譜をめぐって、見知らぬ人から貰った親切一覧表をつくってみた。付表のとおりで、なかにはうかつにも遺失した上衣を、拾って宅急便で送って下さった仁もいる。山女釣の人である。バスがない、あつても回数が少ない。そういうところで頂いた土地の人や都会の人たちのご好意が、改めて身にしみて有難い。混勿山での人の情が、忘れられません。

付表 貰った親切一覧表

No.	年 月	年齢	区分	貰った場所	サービス
1	Apr '76	62	◎	(イ) 桃森-万場町 (ロ) 平原-下仁田-富岡	車
2	Oct '77	64	◎	行小屋下流-沼田駅	車
3	Jan '80	66	○	冠岩橋-西武秩父駅	車
4	Nov "	67	○	盆堀川-五日市駅	車
5	Oct '81	68	○	鋸山の西コル-奥多摩駅	ジブ
6	Nov "	68	◎	日向平-小岩バス停	車
7	Dec "	68	○	石橋神社-藤野駅	車
8	Jun '83	69	◎	奥多摩水根沢中流	上衣
9	Oct "	70	○	笛吹小屋村近-塩山	車
10	Apr '84	70	◎	両神神社の下-秩父市	車
11	Dec "	71	○	七久保-下仁田	車
12	Feb '85	71	○	二瀬湖-大滝村役場	車
13	May '86	72	◎	上州三峰山麓-沼田城	車
14	Oct "	73	◎	中目原-奥多摩-東飯能	車

注: '76 は 1976 年、年齢は私の満年、区分欄の◎は先方からの、○は私からの申し出、サービス欄の上衣は遺失したわが上衣(背広)



もめずらしい夫婦での文学賞受賞となった。まことにめでたい。これで思い出されるのは、故深田久弥氏が『日本百名山』で読売文学賞を受賞されたとき、義弟にあた

る中村光夫氏が戯曲部門で同時受賞されたこと。山の本の世界ではそれ以来のおめでたい出来ごとといえる。
(大森)

第十九回 図書交換会

図書委員会

恒例の図書交換会が、昨秋十月二十五日(土)午後二時から三十九名の会員が参加して本会ルームで開かれた。

今回の出品図書は、十五人の会員から、ここ数年で最大の七八四点が寄せられた。なかでも、図書委員の有志が、一年以上の月日と、延べ一〇〇人日をはるかに超える手間をかけて整理してきた故山崎安治氏の蔵書からの五〇五点は注目の出品であった。

今回の出品図書には特筆すべき貴重本、珍本はなかったが、会場を埋めつくした紀行文・随筆・研究書・登山報告書・案内書・写真集は、多くの人々の視線を浴びてきただけに、手にとってみると、つい欲しくなる不思議な魅力が付け加されていた。さらに、表示価格も、会員相互の交換会にふさわしい特別値であるため、ほとんどの本が競合し、入札本以外も抽選とあいなった。

まず、入札図書は、底値最高値八千円のジャベル著・尾崎喜八訳

「一登山家の思い出」(応募者二人)が九九〇〇円で落札されたのを筆頭に計九冊。以下落札の高値順に、二組あった「大島亮吉全集」(底値五千元)は、一組(四人)が一万六千元で、もう一組(三人)が一万五〇〇〇円と大差が出た。「日本山岳会報」一号(二九号(八千元、一人)が一万円、大島亮吉「漂泊者」(五千元、四人)が九八〇〇円、百瀬美江「山を想へば」(六千元、二人)が八一〇〇円、「岩と雪」八冊(三千元、三名)が七千一〇〇円、田辺主計「エヴェレスト登山記」(二千元、六人)が六千元、「岳人」(二千元、五人)が五二〇〇円で落札された。

抽選本の人気ベストスリーは、十一人で競った中村清太郎「ある偃松の独白」をトップに、八人の桜井徳太郎監修「歴史の山一〇〇選」、つづいて七人でくじを引いた熊原政男「登山の先駆者たち」、「登山の夜明け」、生沢朗「水壁画集」、谷有三「富士山はなぜフ

報告(科学研究委・自然保護委)

第四回ヒマラヤのエコロジー

シンポジウム

ヒマラヤの自然の保護と

利用開発との調和

日時 昭和六十一年十一月十五日(土)

午後一時半～五時半

場所 東京都教育会館三階鶴の間

主催 (社)日本ネパール協会

(社)日本山岳会

科学研究委・自然保護委

第四回を迎えたヒマラヤのエコロジーシンポジウムは人間の関与する部分を主題に採り上げ、自然保護と利用開発の調和について論じられた。

講師は川喜田二郎、大場秀章、杉浦嘉雄、小島寛、新津晃一、並びに千葉重美の六氏で、高橋詢委員の司会で進められた。詳細はシンポジウムネパールの一部として今年出版されるが、ここでは各氏の発言の要約を紹介したい。

「基調講演」日ネ協会々長川喜田二郎氏

ネパールの自然は美しく、人々は純朴だが、自然環境ないし人口増加という点から見ると行政能力の限界にも達し、将に危機的状況にある。その原因として同国の近代化路線や経済上の行詰りの他、政情不安や麻薬禍なども考えられるが、現実にはそれを具体的にどう解決してゆくか、その方法が何にもまして求められている状況だ。

ここで私は民間活力の起用に期待したい。人間まで含めた生態圏(生態区)は局所的な特徴が著しく、例えば標高が五百メートル異なれば対処の方法を根本的に変える必要がある場合もある。これに対し、中央政府の一律的な施策が有効でないのは当然である。これに対しTVAにおけるテネシー河

流域の住民パワーが素晴らしいように、民間活力は頼もしく、且つネパール僻地にも、そのような活力は十分あると考えられるからである。

外国からのボランティア活動にも期待したいが、日本からも此の際適正技術の導入、情報処理法、あるいは教育面などで協力したいものだ。

「ヒマラヤの植生の特徴と現状」東大総合研究資料館教授 大場秀章氏。

ヒマラヤの四千以上の高地にはユキノシタ、リンドウ、サクラソウの類など約千二百種の高山植物が見られ、そのうち六〇％はヒマラヤだけで見られる種である。雪解けから冠雪まで六、八週間しかない場所もあるので、如何に有効に開花、結実するかについて何万年もの間に培われた絶妙な生態も観察される。たとえば一輪咲のトリカブトの類に見られる小型化、地面に這うように葉を拡げた地熱利用法、あるいはマンテマ類のように花が袋状となり、強風下でも虫媒が入念に行なわれる仕組みなどである。

高度が下ると森林の伐採や草原の破壊がすさまじい。人口増や過放牧によるものであるが、自然はひとたび裸地になると、先ず一二年草、続いて多年草が生え、やがて低木林から陽樹林、その後やがと陰樹林になるといった具合で、再生には何百年という年月がかかる。今後は各地域毎に総合アセスメントを実施し、再生可能な見通しの下に自然に対処していかなくてはならない。

「絶滅に瀕しているネパールの鳥類とその保護増殖対策」(財)日本鳥類保護連盟主任研究員 杉浦嘉雄氏。

日本で見られる鳥は五百種であるのに、面積が日本の四分の一で、海岸線もないネパールには九百種もの鳥が見られる。これはネパールが熱帯から氷雪地帯まで含み、多様な森に恵まれているためである。

「ジサンカ」の四冊であった。会場内は一番最後に当りくじが残ることが続いたりして、わきにわいたが、なんといつても、もともとも力が入り、なおかつ楽しかったのは二人で一騎打のジャンケンだ。二人による競合は二〇〇件をこえ、すべてジャンケンで購入権利者を決めた。みんな童心に帰ったように力をこめてこぶしを振っていた。これだけやれば時間はほとんどたつてしまし、最後の一冊の新しい所有者が決まったのは、予定を四十分も超過した三時四十分。山の好きな読書家、愛書家にとってこれえられない交換会は一時間四十分間ではなく、まるで一瞬のうちに終わったようだった。

今回の図書交換会の総売上額は四三四、二一〇円で規定により一〇%ずつをルームと図書委員会に寄付していただいた。出品者は山崎家のほかに次の各氏である。(敬称略・五十音順) 出品者各位には厚く御礼申し上げる。阿部和行、飯島 齊、今西錦司、織田沢美知子、織内信彦、加治川栄二、雁部貞夫、国見利夫、近藤等、斎藤 桂、砂田定夫、中村小一郎、橋爪幸達、望月達夫 (川合 周)

* 図書受入れ報告

十月二十五日(土)に実施された第十九回図書交換会に名誉会員望月達夫氏より出品された一二九点のうち図書室買上希望の二六六点(左表)につき望月氏より寄贈いただけたことのお話がありましたのでお知らせします。(図書委員会)

書 名	著 者 名	発 行 所
地の果ての山々 山 地 理 学 第一次・二次 エベレスト偵察隊報告書 一九七〇エベレスト 登山隊報告書 一九六五・六六 中部ネパール踏査報告 ネパールの山と人 エヴェレストの東	ポニントン/山崎安治訳 ビレイ/奥田・上野訳 日本山岳会 日本山岳会 日本山岳会 慶応山岳部 泊山岳会/ネパール踏査隊 風見 武秀 ヒラリー/藤本三三訳	時事通信社 農林協会 日本山岳会 日本山岳会 慶応山岳部 泊山岳会 山と溪谷社 ベスボール マガジン社 創文社 白水社 山と溪谷社 校倉書房 朝日新聞社
山の A B C 大岩壁の五十年 山 岳 事 典 年報 独標 カナダ・エスキモー	尾崎・深田・串田 リカルド・カシン/水野勉訳 川崎隆彦 編 独標 登高会 本多勝一・藤本高嶺	

しかし近年、ネパールの森林の減少や環境の変化、さらに人為的な捕獲のため、絶滅に瀕している鳥も目立つようになっている。今回はキジに限って話したい。

ネパールのキジ類では、現在、チベットセッケイ、ニジキ(黒鳥)、カムムキジ、ヒオドシジュケイが絶滅に瀕しており、ハイイロジュケイ、ハイバラジュケイ、ジュケイの三種も、隣国などに生息の可能性はあるが、数少なくなってきている。

偶々わが国では九州北部にだけ住むアカヤマドリや、九州南部にだけ住むコジロヤマドリなどについて既に効率のよい人工授精の方法が確立されているので、この方法を上記キジ類に適用すべく検討中である。

「ヒマラヤの地表・森林の崩壊状況とその保全・生活との関係」 富山大学教授 小島寛氏。

数日前三ヶ月のネパールの旅から帰国したが、現地の自然の荒廃は予想以上に急速に進行し、特に標高の高い土地に人為的影響がよく及び、危機的状態となっているのが印象的であった。

その原因の第一はネパールの地質の脆弱さである。ちょうどプレートの衝突部に当り地形は急峻、且つ変成岩地帯で崩れ易い上、気候的にも高温・低温、多雨・乾燥などそれぞれ風化を助長している。第二は人口過剰の圧力で、焼畑、薪炭、用材、放牧などのため、全森林の五〇%が、この五十年間に失われた。

そしてこれらの結果、斜面は崩壊して濁流となり、さらに土石流となったり、下流域に氾濫を起したりしている。現在一万五千方メートルの土地が土砂で埋って不毛の地となっている。一方、保水能力も低下して乾期には渇水となっている。

今後ネパールでは環境容量の見地から人及び家畜数は是非制限しなくてはならない。さらに文盲率九〇%を何とか減らして、環境保全乃至自主的

表1 ネパールの人口と耕地面積

項目	南部タライ地域	中部丘陵地帯	北部山岳地域
海拔	800m 以下	800 ~ 3000m	4000m以上
面積	8 %	67 %	25 %
人口	25 %	70 %	5 %
耕地面積	70 %	30 %	
農業人口	44 %	56 %	

な再生産への道を教育すべきであろう。

「ネパールの人口動態と自然環境の問題点」 国際キリスト教大学准教授 新津晃一氏。

ネパールは南部のタライ平原地域と、中部丘陵地帯、並びに北部のヒマラヤ山岳地域に大別できる。これを比較したのが表1である。

ネパールは人口急増の結果、耕地拡大、薪炭木材の需要の増加、家畜数増加が起り、森林面積の激減や土地の不毛化が生じた。特に北部では人間が生活できるか否かの極限に達し、既に南方への人口の押出し現象が始まっている。現在ではタライ地方の住民もさらにインドその他に出移りに出ている有様である。

しかも経済成長率は人口増加率を下回っている、官僚の中には外国からの医療援助は自分の間不用と発言する者まで出ている有様である。すなわち幼児死亡率は一五%と高く、平均寿命が男四十七・五歳、女四十四・五歳と低いにも拘らず、ネパールでは家族人口計画の普及の方を優先させ、医療援助もこれらの計画と組んでなされるのでなければ受入れ難い状況にきている。

人口の見地からも、自然環境の保全、災害防止、土地生産性の向上などは緊急を要する課題となっている。

「地場産業の振興と自然の保全」 関東学院講師千葉重美

大無間山

集会・婦人懇談会合同

十月十八日、十九日、寸又峡奥にある大無間山にいった。
大垂沢橋で林道をはなれ登山道にとりついて約二時間は、ヤブの山とおどかされていたけれども、しっかりと道がついていた。ガレ沢をすぎ広く開けた馬の背状の尾根についた頃から道を失ってしまった。五万分の一の地図には尾根通しに破線がついているので忠実に尾根をたどっていくことにした。しかしひどいヤブで顔や腕をビシビシと打たれたり、亀が裏が

えしでもがくように笹の中にころがったりが始まった。苦むす倒木をまたぎ、くぐり、するうちに広い笹原に出た。特徴もなく、ガスにまかれたら難儀しそうな場所だ。縦横にけもの道が交差している。ここは「鹿の踊り場」かもしれない。もみじに鹿か。これで猪が出てくれば花札だけだ。しかし今はそんな呑気なことは言っていられない。ひと休みして、また気をとりなおして進む。密生した雑木林になり、ザックをぬくの苦労した。そのうち三角点に出た(一八八三)。こんなにひどい山なのにさすがにルートは誤っていないことが確認された。大無間

書名	著者	発行所
現代世界ノソフィクシオン全集3 世界最悪の旅 一人ぼっちのヒマラヤ	チェリイ・ガラード／加納二郎訳 向後 元彦	筑摩書房 ベースボール マガジン社
日本山岳会学生部 年報 No. 11963 岩 登り	JAC 学生部編 船田 三郎	JAC 学生部 日星書店 AMKAS
資料目録 インド東大陸 ブマリ・テッシュ登頂	向後元彦・石井一郎編 一九七九北海道庁 カラコルム遠征隊	北海道庁 朋文堂
総高の岩場 北大山岳部報8 サイバル登頂	岩 稜 会 北大山岳部	北大山岳部 サンケイ出版局
中央アジア・蒙古旅行記 アビ・悲劇と幸運の山	ロビニルブルク／護 雅夫訳 江上 康	桃源社 創元社
冬山技術セミナー 八千米の上と下	ヘルマンブル／横川文雄訳 ディレンフルト／諏訪多実蔵訳	山と溪谷社 朋文堂 朋文堂
第三の極地 世界山岳名著全集 ヒマラヤの高峰	あかね書房 深田 久弥	あかね書房 白水社

氏。

ネパールの人口経済問題に関連して、現地の地場産業としては原料の収量をより多くし、また資源に付加価値を産み出し、雇用の拡大にもつながるような中小企業の振興が要望されている。業種としてはカシミア織、木工、薬草、皮革などが考えられるが、ここでは手漉き紙をとり上げる。原料となるロクタは沈丁花科の灌木で標高二千二百四十メートルの土地に自生している。しかし最近自然環境の悪化と乱獲のため入手が困難となってきた。栽培法の開発と共に環境保全が第一の問題である。

第二は経営能力の問題である。かつて日本輸入銀行が十億円に上る融資をネパールに行なったが、企業経営の手腕がなく十年間も眠り続けたということがある。このような面でもわが国からの協力が必要である。
ロクタは日本のみならず良質の原料で、日本の手漉業者が様々の製品に加工して展示したところ、皆、目を見張ったくらいである。ただ、日本の企業は原料を輸入し、日本で加工する方が利益につながるが、なかなかネパールの地場産業を援助しようとはしない。世界の発展を目差して、

山が東の方に尾根をのばしてみえていた。三角点からは下りになり、背丈程の笹の中を足さぐりで下り、笹におおわれた窪地に着いた。ここは「三方窪」という所だろうか。ここまで二時間四十分。テントを張りおえると秋の陽はたよりなげに低い弧をえがいて空の下へ行きかかっていた。夕食後は焚火を囲んで談笑が続いた。昨夜降った雪がテントの上にとっすらと積り、焚火のおきを黒く

光らせていた。笹の葉一つ一つに小さな雪がのっけているので歩きながら口にいれる。道はずいぶんわかりやすくなり、昨日ほどのアルパイトはなさそうなので内心ほっとした。三隅池を経て頂上に着いた。三方窪から二時間三十五分。頂上は狭くて観測用のヤグラが建っていて、その上に登ると三六〇度の眺望が楽しめた。またあのヤブこぎをするのだからあんまりのんびりしてはいられない。

ない。トントんと調子よく下っていくと単独行動の人に逢った。この人に逢わなかったらヤブに突進したところだったのだから神の助けか道を教えてもらったのでテントを撤収してから北斜面についている道を下った。ヤブ尾根から二百メートル下を、思いもかけない水平道路が三方窪からついていた。帰路寸又峡温泉につかりながらすっかり愛着のわいてしまった大無間山を思い、次は田代から小無

今後は技術経営の協力をしたり、現地人の雇用の途も拓くなどの努力が必要と思われる。

今回のシンポジウムは内容も豊富で、質疑応答の時間が十分採れないうらみがあつたが、この点は終了後開かれた懇親会で、ある程度満たされた。懇親会には人口問題で来日中のネパール家族計画協会副会長である Bardi Raj Pande 博士も出席され大いに盛上った。

なお昨年の第三回シンポジウム「ヒマラヤの生態系と環境」の記録が今回、シンポジウムネパール十四巻(一九八六)八六頁に集録され出版された。希望者は日本山岳会事務局宛申込みたい。頒価は一冊八百円(送料二百円)である。

出席者 川喜田二郎 大場秀章 杉浦嘉雄 小島寛 津見一 千葉重美 堀内章雄 関塚貞亨 遠藤光男 小嶋節子 黒石恒 春田俊郎 春田静子 菅野弘章 手塚信利 岡部田鶴子 田村真知子 中村純二 中村あや 大河原由紀子 高遠宏 中田誠 奥野道治 奥野玲子 神長幹雄 熊谷義信 高橋つら 岡国利夫 大島輝夫 関保 稲垣充彦 斎藤かつら 片岡博 沢井政信 石井恵美子 秋山恭子 寺田鎮子 大垣晃一 林武彦 辻井清吾 ハロルド・ソロモン バルディ・パント 三沢喜修 以上四十三名 (中村純二)

科学研究会・自然保護会

間山、大無間山を歩いてみたいと思った。

参加者 新井陽一郎、神山良雄、高澤英雄、船木威志、柴田初子、梅野淑子、藤田礼子、佐藤知恵子、山田靖子

注(山に入ると水の補給は出来ません。林道は片道16kmあります)

(山田靖子)

東京農大コンロン

登山隊報告会

海外・総務委員会

去る十一月十四日(金) ルームにて東京農大コンロン登山隊の報告会が会員懇談会として、海外・総務委員会主催で開催された。

さすがにタクラマカンの南、コンロン未登の最高峰(七一六七m)初登頂ということで、当日は吉沢名誉会員をはじめ立見の出るほど会員が集った。まず総隊長の織内名誉会員より、若き日の夢・タクラマカン・コンロンの話に始まり、次いで隊長である早坂会員よりスライドを使った報告があった。

砂漠に流れる長大な水河、蒼穹に立つ秀峯、そこに繰広げられた登山は、生死を賭けたといったドラマチックさはなかったものの、小さな事故すらなく、全隊員による初登頂となり、だからこそすばらしい登山であった。当日手渡された資料も懇切なもので、正式報

告書の発行が楽しみだ。

(絹川祥夫)

第二十九回紅葉会

(南アルプス寸又溪谷)

静岡支部

十一月八日正午、東海道線金谷駅に集合、大井川鉄道にて千頭駅着、マイクロボスに乗り変えて午後四時又温泉「山の家」着、早速に入湯して夕食、本部よりご出席いただいた山田副会長、中村テル名誉会員の挨拶、会員それぞれの自己紹介があった。夕食後は宿舍裏の広場で盛大なキャンプ・ファイヤーがたかれ、永野会員心づくしのおでんとしてのさかかにアルコールは飲み放題の大集いが十一時ちかくまで続いた。

翌九日朝食後、沢口山登山班十名は八時出発、十一時過ぎ頂上着、千頭への直接下山路は荒れて通行困難とのことで往路を引きかえし午後二時温泉着解散した。マイカーやバスが大渋滞の観光道路のすぐ上にブナの原生林があったり、数日前に使われたと思われる鹿のヌタ場などがあり、あらためて南アルプスの山の深さが思われた。温泉残留組は紅葉絶頂の寸又川溪谷を上流に向かい、美しい色彩の景観を楽しんで解散した。

このたびの紅葉会は柴田会員のご配慮により大井川鉄道後藤社長に直々のお出ましを頂き、両日に

日本山岳会

フィルムライブラリー

ご利用について

フィルム委員会

日本山岳会の保有する映画フィルムを、以下の規定により貸出します。有効にご利用ください。

利用規定

- 一、利用ご希望の方は、日本山岳会事務局へ、申込書に記入の上お申し込みください。
- 二、申込書は事務局に用意してあります。おいでにならない場合はお送りしますので連絡してください。
- 三、利用できる映画フィルム、および利用料金はフィルムリストをごらんください。料金は利用時にお支払いください。
- 四、フィルムの送料と返送料は利用者側でご負担願います。
- 五、利用期間は原則として一週間とします。一週間をこえる場合はお申出ください。
- 六、フィルム上映に際しましては、あとの利用者のことを考え、大切に扱うことをお願いいたします。とくに映写機の使用に習熟された方の操作を必要条件とします。
- 七、万一、フィルムを切断または損傷した時は、勝手にセロテープなどで補修したりしないで、その箇所のバーフォーレーションに目印として糸を差し込み、そのままの状態でききこんで返却してください。
- 八、その際、切断・損傷の内容を報告書に書いてフィルムとともに返却してください。
- 九、フィルムの切断、損傷、紛失等の場合は、その度合により相当額をご負担いただくことがあります。

フィルムリスト

タイトル	製造年	製作者	上映時間	利用料金(円)
マナスルに立つ	1956	毎日映画社	97分	20000
ジュガールヒマール	1958	日本テレビ	60分	12000
(白黒・無声)				
エベレストへの道	1970	NHKテレビ	80分	16000
ナンダデヴィ縦走	1976	日本山岳会	30分	6000
穂高讃歌	1979	ジブプロダクション	33分	7000
チョモランマ	1980	日本テレビ	90分	18000
チョモランマ北壁隊	1980	日本テレビ	30分	6000

九、利用者は、日本山岳会会員であることを原則とします。

わたって特別のお手配とご案内を
頂きましたことを厚く御礼申しあ
げます。

参加者 本部及び他支部十二名
静岡支部十九名
計三十一名 (氏名略)
(西郷正郎)

虎毛山々行

秋田支部

トラ年に因んで計画された虎毛
山(一、四三二・九)山行は、
去る十月十一、二の両日、本部会
員など二十五名の参加を得、予定
の通り実施した。

集合地である秋田県・秋の宮温
泉「秋の宮山荘」に集い、午後六
時懇親会を開催。翌朝、心配され
た雨も降り止み、朝食の後ただち



に宿のマイクロバスで登山口に向
う。

午前七時五十分、登山口の赤倉
橋を出発し、赤倉沢添いの平坦な
道をしばらく辿り、徒渉地点の休
憩地で一休み。この先、稜線上の
高松岳への分岐地点まで階段状の
長い急坂が続いており、前夜の酒
宴が一気に祟り一同アゴを出す。

午前十時四十分、高松分岐(標
高一二三四地点、二万五千分の
地図のコースは旧道)に到着。ガ
スの合間に隣接の高松連峰や目指
す虎毛山々頂が最盛期の紅葉を透
して美しく望まれる。

ここから平坦な主稜線上の道を
辿り、山頂への急坂を登って少し
行くと広々とした高原状の山頂に
飛び出す。午前十一時三十分過
ぎ、一同統々と到着する。

紅葉期に入ると、山頂一帯がト
ラの毛皮のような黄色づくことか
ら、この山の名があり、眺望の良
い山頂には避難小屋もある。

昼食・記念撮影の後、午後一時
下山開始。赤倉橋から車で鬼首峠
を越えて帰京する一部の本部会員
と別れ、午後五時無事山行を終
る。

なお、この日、赤倉沢本流を沢
登りしていた地元山岳会々員の
一人が、上部の滝で転落するとい
う事故が発生。当支部携帯のアマ
無線で救援を依頼し、より敏速な
救援活動を行なった。残念ながら
死亡していたが、協力下さった会

●映画フィルム利用申込書内容

- 一、利用者 住所・電話・氏名・会員番号
- 二、希望フィルム名 題名他・利用料金
- 三、利用期間 年 月 日 ~ 年 月 日
- 四、利用場所
- 五、利用目的

●利用報告書内容

- 一、利用回数
- 二、観客数
- 三、切断・損傷があった場合、その内容
- 四、フィルムへの感想など
- 五、利用者氏名

フィルムライブラリーご利用について

会

17日 フィルム委員会

18日 婦人懇談会

19日 三水会、山岳博物館を考え
る会

20日 総務委員会(晩餐会打合
せ)

21日 科学委員会

25日 総務委員会、自然保護委員
会、三国登山打合わせ

26日 婦人懇談会、科学委員会

27日 学生会(書簡講習会)会報
委員会、三国登山打合わせ

28日 医療委員会講演会(凍傷)

29日 三国登山第一回実行委員会
11月ルーム利用者37名

会員異動

改姓

小宮山葉子(九九一五)↓立川葉
子

物故

吉川静三(五九四八) 8・11

三谷孝一(四〇九二) 11・9

松本秀則(九七八六) 11・18

終身会員へ

武田満子(六〇四三) 11・25

会務報告

十一月理事会

11月5日午後6時30分

場所・本会ルーム

出席者 今西会長、山田、大塚副
会長、鳴原、橋本、大橋、松永、
浜口、梅野、高遠、鈴木、太田、
岡沢、平井、大森、絹川、関塚各
理事、宮下、中村、山口各評議員
委任 山本監事、松田評議員
審議事項

◎三国合同登山の件 現在ネバ
ル、中国との打合せ中、組織につ

ルーム日誌

11月

- 4日 総務委員会
- 5日 評議員会、理事会
- 6日 図書委員会
- 7日 三国登山打合わせ
- 10日 図書委員会、三国登山打合
わせ、自然保護委員会
- 11日 婦人懇談会
- 13日 山研委員会、学生部報告会
(東洋大ヌン)
- 14日 会員懇談会Ⅱコンロン報告

図書受入報告

図書委員会

昭和 61 年 4 月分受入図書

1. 新妻喜永著「日本の名峰 18 中央アルプスと御岳」山と溪谷社 1986 (版元寄贈)
2. 加藤富吉編「不撓不屈の岳人 加藤文太郎の追憶」山本茂信昭和 60 (購入)
3. 上村信太郎編「アマゾン秘峰ロライマ 遠征レポート 1985」いわびりアルパインクラブ 1986 (編者寄贈)
4. 沢田賢一郎著「釣りの戦略、溪流のドライ・フライ・テクニク」山と溪谷社 1986 (版元寄贈)
5. 帯広畜産大学山岳部インドヒマラヤ登山隊 1983「ジョーギン I 峰 6,465 M」帯広畜産大学山岳部 1985 (編者寄贈)
6. 早稲田大学山岳部「時報第 24 号 昭和 58 年 4 月～59 年 9 月アンデス合宿報告」早稲田大学山岳部 昭和 60 (編者寄贈)
7. 法政大学体育会山岳部「山想第 7 号創部 60 周年記念」法政大学体育会山岳部 昭和 61 (編者寄贈)
8. Verma, K.B. "What I found in Japan" Nepal-Nippon Research Studies Centre 1985 (著者寄贈)
9. 近藤辰郎著「日本の名峰 19 白馬岳と後立山連峰」山と溪谷社 1986 (版元寄贈)
10. 月刊・タウン情報とやま編「とやま山歩き」C・A・P 1986 (版元寄贈)
11. 成蹊路高会紅芝寮 50 周年記念刊行委員会編「紅芝寮日誌ヒュッテンプーフが語る半世紀」丘書房 1986 (成蹊路高会会長中屋建武氏寄贈)

5 月分受入図書

1. 南方派遣第 14 兵站病院の仲間たち「サバの朝、北ボルネオ追想記」石井房雄 昭和 61 (石井房雄氏寄贈)
2. 藤江幾太郎著「藤江幾太郎 山の画文集」北荘画廊 昭和 61 (藤江幾太郎氏寄贈)
3. 廣江研著「我が友植村直己」立花書院 昭和 61 (廣江研氏寄贈)

4. Masahisa, Goi "The Future of Mankind" Byakko Press 1985 (松田雄一氏寄贈)

6 月分受入図書

1. Józef Nyka "Gipfelsturm im Karakorum" Brockhaus 1977 (ポーランド登山隊寄贈)
2. Z. Kowalewski "Na szczytach Himalajów" Wydawnictwo Sportu Turystyka 1983 (ポーランド登山隊寄贈)
3. Józef Nyka "Taternik Nr 252" Polskiego Zwizku Alpinizmu 1982 (ポーランド登山隊寄贈)
4. Józef Nyka "Taternik Nr 258" Polskiego Zwizku Alpinizmu 1985 (ポーランド登山隊寄贈)
5. Józef Nyka "Taternik Nr 252" Polskiego Zwizku Alpinizmu 1985 (ポーランド登山隊寄贈)
6. 下嶋溪著「ランニング登山」山と溪谷社 1986 (版元寄贈)
7. 花畑日尚著「日本の名峰 8 尾瀬が原・燧・至仏」山と溪谷社 1986 (版元寄贈)
8. 白旗史朗著「山の花抒情」日本カメラ社 昭和 61 (版元寄贈)
9. 横山厚夫著「一日の山・中央線私の山旅」実業之日本社 1986 (横山厚夫氏寄贈)
10. アルパインクラブ雪線社「雪線社 50 周年記念報」アルパインクラブ雪線社 昭和 52 (山本敏三氏寄贈)
11. アルパインクラブ雪線社「76 マッキンレー山遠征報告書」アルパインクラブ雪線社 昭和 51 (山本敏三氏寄贈)
12. アルパインクラブ雪線社「雪線社報告 No. 4」アルパインクラブ雪線社 1964 (山本敏三氏寄贈)
13. 若林岩雄編「新版関東東部の沢」白山書房 昭和 61 (版元寄贈)
14. 川崎市教員登山隊編「ヌン峰 7,135m」川崎市教員登山隊 1986 (編者寄贈)
15. 日中友好納木那尼峰合同登山隊編「ナムナニ」毎日新聞社 昭和 61 (編者寄贈)
16. Roseken Takahashi-Lesser "Das Hohe Lied" More Joy 1985 (ローゼレッサ氏寄贈) (以下次号)

筑摩書房の山の本

〒101 東京神田小川町2-8 ☎03(291)7651

堀田弥一

四六判・1800円

ヒマラヤ
初登頂1936年の
ナンダ・コート日本の近代アルピニズムの幕明けをかざった
ナンダ・コート初登頂から五〇年

山を愉しむ

烏賀陽貞正

六〇歳からの山登り 登山を始めて十八年——老夫婦が踏破した山は槍ヶ岳など九〇峰。12000円

野鳥を愉しむ

烏賀陽貞正

知床のケイマフリ、甲府のコノハズク……鳥との出会いを求めて全国を訪ねる野鳥紀行。1200円

山のスケッチだより

山里寿男

山の魅力にとりつかれ、絵筆をにぎり続けてきた山岳画家の心の旅。ちくま少年図書館 1200円



☎ 234-6659

この電話で
もお知らせ
しています

●図書委員会の催し

①第二十三回「この一本展」および
「山岳図書を語る夕べ」開催

日時 二月十四日(土) 午後二時
場所 ルーム・集会所、図書室

今回の「この一本展」は、故
山崎安治氏所蔵の貴重な和綴じ
本を展示いたします。

また、併催の「山岳図書を語
る夕べ」は、『山崎安治氏と日
本登山史』というテーマで、近
藤信行氏に語っていただきま
す。ご期待下さい。

②第十四回山岳史懇談会

日時 三月二十八日(土)
場所 ルーム・集会所
講師 谷口現吉氏、金山淳二氏
ほか。

昭和七、八年頃の慶応山岳部
の活動を中心に、当時部員であ
った講師の方々に語っていただ
きます。

図書委員会

編集後記

寒中お見舞申上げます

この欄に書くのは久しぶりのこ
と、昨年はそれほど会の動きが活
発だったのか!

しかし、締切間際の飛込み原稿
など・・・、思いを馳せれば、何
だ、ということになりかねない。
だが、生活に追われながら、字を
書くより、喋ることを得意とする
行動派には、簡単な文を書くのも
たいへんな努力だ。

主語や目的語があつて述語がな
い、はて何処で文が終るのか・・・
あの井上ひさしが激賞した、木下
是雄会員の『理科系の作文技術』
でも読んでくれたらと思ったりす
る。しかし、真摯なその中身、少
し手を入れれば、下手な文筆家を
凌ぎかねない力を持つてくる。
・・・そして、会報は充実してき
たなどと言われることになる。
後回しにされた自分の仕事の山
を眺め、ブアーなわが身に苦笑い
する。

(〇)

昭和六十二年一月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五一四

サンビュウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 今 西 寿 雄

編集代表 岡 沢 祐 吉

電話東京(361) 四四三三

振替口座 東京三 四八二九番

東京都港区六本木三ノ一 三〇

ABビル

印刷所 株式会社 技報堂